国武大紀要 (Int. Budo Univ. Journ.)
第21号：155−163（2005）

紹　介

古川哲史名誉教授寄贈の武士道の古典紹介

魚住孝至

平成十六年十一月、古川哲史名誉教授から、江戸時代の武士道書二十一点百六十一冊が国際武道大学図書館に寄贈された。これらの書は、武士道研究にとっても国際武道大学にとっても重要であるので、成澤三雄学長の許可を得て紹介することにする。

古川哲史名誉教授の武士道研究

今回の寄贈書は、武士道研究の大家の古川哲史先生がご自身で研究するために集められた貴重な書籍である。それ故、まず先生の簡単な紹介をしておきたい。

古川先生は、明治四十五年（一九一二）鹿児島県生まれ。昭和十年（一九三五）東京帝国大学文学部卒業。戦前の東京帝国大学から戦後の東京大学で昭和四十八年（一九七三）の定年退職まで長年研究と教育に携わり、多くの研究者を育てられた。東京大学名誉教授。亜細亜大学前教授。本学名誉教授。日本思想史学会、日本倫理学会、日本道徳教育学会の会長・理事などを長年務め、紫綬褒章を受けられた。今年九十四歳になられるが、武士道の研究を続け、また詩歌も作られている。

主著『理想的日本人』（毎日新聞社）、『日本的求道心』（理想社）、『広瀬淡窓』（思文閣）、『定本斎藤茂吉』（有信堂）など著書多数で、『日本思想史講座』（雄山閣）、『道徳教育講座』（角川書店）、『和辻哲郎全集』（岩波書店）、『西村茂樹全集』（思文閣）など編著も多いが、ここでは武士道関係の研究に絞って紹介する。

まず「武士道は死ぬことと見つけたり」という一句で知られる『葉隠』の研究が有名である。『葉隠』は、十八世紀初期、佐賀藩士であった山本常朝が武士の心得を語ったものであるが、何事にも後れをとらぬよう死に狂いで藩を一人で担う気合で主君に献身する激烈なことが書いてあるので、江戸時代には佐賀藩でも写本の形で秘蔵されており、明治以後も佐賀の一部で知られていただけであった。先生は、『葉隠』の写本八種類を調査・整理し、本文を校訂して昭和十五年に岩波文庫（上・中・下）に入れられた。戦時下の当時の社会の中で、特に戦場に赴く多くの若者がこの本を持っていったと言われる。この文庫本により『葉隠』は一挙に武士道の古典と言われるようになった。この本は、今日なお増刷され最近では三十二版が出ている。また昭和十八年には大道寺友山の『武道初心集』を岩波文庫に入れられた。『武道初心集』も、十八世紀初期に死の覚悟を基にした戦国武士の気風に儒教的な士道論を加えて武士の道徳を説いた本であるが、先生は、幕末に流行した松代藩の刊本は原本に大幅な改定が施されていることを示し、原本を伝える写本を翻刻され、今日でもこの本が研究のテキストになっている。また昭和二十五年には、十七世紀初期に武田信玄の事蹟を中心に語られた『甲陽軍鑑』の第一冊（巻六まで）を岩波文庫で出された。多くの刊本・異本を整理して校訂した本文であるが、第二冊以降刊行されていないことが惜しまれる。

著書『武士道の思想とその周辺』（福村書店・一九五七）は、新

渡戸稲造の『武士道』以来、特に戦時下で盛んに言われた「武士道精神」などとは別に、着実な思想史的な研究に基づいた学問的書物で、今日でも武士道研究の古典として挙げられる。その第一部は武士道の流れの概説で、特に『甲陽軍鑑』の思想を紹介し、第二部は『葉隠』とその思想、第三部は『武道初心集』とその思想を論じている。「もっとも固有の武士道」は「戦国武士の道を背景として『甲陽軍鑑』において初めて本格的に自覚形成され、その多少の影響の下に小笠原昨雲の『武士道功者書』、『軍法侍用集』、『諸家評定』などを経て、享保の前後に及んで『葉隠』や『武道初心集』などにおいて明確な自覚形成されたもの」と言われている。戦前・戦後に上述の三著のテキストを出され、本学に関係されてからは『軍法侍用集』の翻刻を出版し、続いて『諸家評定』も本紀要で翻刻を完結し、今年出版の予定であるから、これらの重要文献をほぼ全て活字化されたことになる。この度寄贈された書籍は、まさにこの「もっとも固有の武士道」の原典を集められたものである。

国際武道大学との関係

先生は、国際武道大学の設立構想時から教員人事などの相談に乗られ、一九八四年の開学時からは客員教授として必修科目「武道概論」を担当され、九五年まで講義された。本学開学翌年に出来た日本武道館の武道科学研究センター（後に本学に移管され、現在の武道・スポーツ科学研究所となる）の運営委員となり、研究体制の確立に力を尽くされた。特に講義後、武士道研究として江戸初期の軍法書『軍法侍用集』の解読を筆者と羽賀久人助手（当時）とに指導された。この研究の成果は、研究センターと研究所の年報に計七回にわたって解題・翻刻を連載され、『戦国武士の心得―『軍法侍用集』の研究』（ぺりかん社・二〇〇一）として出版された。続いて平成十三年度から『諸家評定』の翻刻を研究所年報と本紀要に計八回連載され、紀要本号で完結、『『諸家評定』―武士道論の成立』（新人物往来社）として出版予定である。また本紀要第一号に「『葉隠』の四誓願」を特別寄稿された他、日本武道館の月刊『武道』の国際武道大学特集の対談にも三度登場、また同誌に「『葉隠』の世界」、「献身の道統」の題で長く連載された。『葉隠の世界』は単行本（思文閣）にまとめられた。

さらに本学の第一回大学祭の折、岸野雄三副学長（当時）の強い希望により、今回の寄贈書をお借りして大学図書館で展示した。同様の展示は一九九八年の松前重義記念館のリニューアルオープンでもなされた。これらの縁から、今回一括して国際武道大学に寄贈されることになったのである。

寄贈書の紹介

寄贈された書目は、表1の通り、二十一点百六十一冊である。これらを分類して、その内容を簡単に紹介することにする。

表1．古川哲史氏寄贈本リスト

書名	巻数	冊数	著者・編者	成立・刊行年
1．諸家評定	二十巻	20	小笠原昨雲	明暦四年（一六五五）刊
2．甲陽軍鑑	巻八～巻二十	13	高坂昌信原作	万治二年（一六五九）刊

3. 改正新版甲陽軍鑑	二十二巻	10	高坂昌信原作	元禄十二年（一六九九）刊
4. 甲陽軍鑑縮刷版	二十二巻	10	高坂昌信原作	元禄十二年（一六九九）刊
5. 甲陽軍鑑抜粋		1	高坂昌信原作	巻十五を抜粋した写本
6. 信玄全集	二十二巻目録	25	（甲陽軍鑑異本）	寛文年間（一六六一～七三）刊
7. 信玄全集末書	二十巻巻十欠	19	（甲州流軍学書）	寛文年間（一六六一～七三）刊
8. 兵法雄鑑	乾坤	2	北条氏長	正保二年（一六四五）版の写本
9. 岩淵夜話	上下	2	大道寺友山	享保元年（一七一六）版の写本
10. 霊巌夜話	上下	2	大道寺友山	享保四年（一七一九）版の写本
11. 落穂集追加	十巻	5	大道寺友山	享保十三年（一七二八）版写本
12. 参考落穂集	三巻	7	柏崎永以	寛政六年（一七九四）版の写本
13. 武隠叢話	九巻目録	10	国枝清軒	延宝八年（一六八〇）版の写本
14. 孫子国字解	十三巻	10	荻生徂徠	寛延三年（一七五〇）刊
15. 孫子俚諺抄	上下	1	神田白龍子	享保年間（一七一六～三六）刊
16. 絵本孫子童観抄	十三巻	14	中村経年編輯	安政三年（一八五六）刊
17. 改正人国記	上下	2		元禄十四年（一七〇一）刊
18. 諸子男子訓	上下	2	井沢長秀	享保四年（一七一九）版の写本
19. 切腹介錯式輯略		1		寛文十一年（一六七一）版写本
20. 武士初学指南		1		享和二年（一八〇二）版の写本
21. 甲陽軍鑑		4	酒井憲二解題	（尊経閣蔵刊本の影印本）

1.『諸家評定』　刊本全二十冊

小笠原昨雲の軍法書。元和七年（一六二一）成立で、明暦四年（一六五八）刊行。戦国時代の武士たちの多くの行状を載せ評したもので、合戦時から平時までの「武士の嗜み」が詳しく語られている。「武士道」の語も使われており、江戸初期の武士道論の初発の形が見られる。本紀要と研究所年報に計八回にわたって翻刻した底本である。

2.『甲陽軍鑑』　刊本等六種計七十八冊と影印本四冊

『甲陽軍鑑』は、甲斐の武将・武田信玄とその子勝頼の二代の事蹟を記した軍記物語。信玄の遺臣・高坂弾正信昌の原作で、その没後も書き継がれ、最終的には小幡景憲が編集に関わったと言われ、元和末（一六二三）頃までには成立。川中島の合戦での山本勘助の活躍や、信玄と上杉謙信の一騎討ちの場面など

は、本書に基づく話である。小幡景憲は本書の研究を基にして甲州流軍学を始めた。江戸時代には武士に最も愛読された書の一つであり、各種刊本が多く、明治以後何度も活字化されている。刊本によって本文が多少異なる。先生は、八種類の刊本の本文を比較し、二系統あることを指摘された。今回寄贈されたのは、広く流布した万治二年（一六五九）版の十三冊、元禄十二年（一六九九）改正新版の十冊、同年の縮刷版十冊、また『甲陽軍鑑』を改編した『信玄全集』（寛文年間一六六一～一六七三）全二十五冊と、それを基に軍学的にまとめた『信玄全集　末書』十九冊である。また『甲陽軍鑑』の巻十五を抜粋した写本もある。

1．諸家評定　刊本全20冊

さらに流布本以前に元和末頃に出されたかと見られる尊経閣

2．甲陽軍鑑　刊本６種類計78冊

蔵の刊本の影印版『甲陽軍鑑』四冊（酒井憲二解題・勉誠社）も同時に寄贈された（リスト21）。

3・『兵法雄鑑』　写本全二冊

北条氏長の軍学書。正保二年（一六四五）成立。氏長は、小幡景憲の弟子で甲州流軍学を学んだが、本書において、中世以来の日取・方角の吉凶などの呪術的な要素を省き軍法を合理的にまとめ直した北条流軍学を始めた。城の構えや陣形などの図も入った大判の写本である。

3．兵法雄鑑　写本２冊

4・大道寺友山関連書　写本四種計十四冊

大道寺友山は、北条氏長門から山鹿流軍学を興（おこ）すとともに儒教的な士道論を始めた山鹿素行の弟子であり、『武道初心集』の著者として有名である。晩年には戦国期の逸話を大量に書き残している。『岩淵夜話』全二冊と『霊巌夜話』全二冊は、徳川家康（父が家康の子忠長に仕えた関係）の逸話を六十歳代に書いたもので、これらを基にして二十数年後の享保十二年（一七二七）に家康の事蹟を編年体で著した『落葉集』全三十巻を完成

4．大道寺友山関連書　写本４種類計16冊

し、さらにそれを増補する形で『追加落穂集』全五巻を著した。『参考落葉集』全七巻は、寛政六年（一七九四）に柏崎永以具元が、『落穂集』にある友山の問いを書き写して、それに答える形で書いたもので、『落穂集』を補うとともに友山研究のための基礎資料となるものである。

5・『武隠叢書』　写本全十冊

国枝清軒著で、大永元年（一五二一）から天正十四年（一五八六）までの戦国武士のさまざまな行状、武辺の逸話を集めたもので、別名『武辺噺（はなし）聞書』とも言う。延宝八年（一六八〇）成立。全目録を合わせた揃いの写本である。

5．武隠叢話　写本　全10冊

6・『孫子』注釈書　刊本三種計二十五冊

『孫子』は中国兵法の古典として、中世以来日本の軍法・軍学の根本にされていた。江戸に入ってからも、林羅山、山鹿素行、新井白石などの『孫子』注釈書が数多く著わされた。

荻生徂徠著『孫子国字解』全十冊。徂徠は古文辞学の儒学者として有名だが、元来「文武一途」として軍学への関心も深く、

6．孫子注釈書　刊本３種類計26冊

中年期の元禄末（一七〇三）頃、『孫子』を逐一注釈した書で、説明には剣術の例も出している。寛延三年（一七五〇）の刊本。

神田白龍子『孫子俚諺解』。著者の白龍子は講釈師であるが、武道・武士道への造詣が深く、佚斉樗山の剣術書『天狗芸術論』の序も書いている。『孫子』をかなり自由に解説している。表紙裏に「享保年間（一七一六～三六）開板」と書き込まれている。

『絵本孫子童観集』（全十四冊）は、中村経年編輯で安政三年（一八五六）の刊本。孫子の本文を、日本の合戦や武将の話を持ち出して説明し、所々に絵を入れて読みやすくしたもの。

7.『諸子男子訓』　刊本全二冊

7．諸子男子訓　写本２冊

井沢蟠龍長秀著。長秀は、正徳五年（一七一五）の『武士訓』全五巻が有名だが、本書はそれより後で、武士の教養としてもより専門的な書き方をしており、特に第三冊「武芸伝」には射術、剣術、槍術、柔術などの記述がある。

8.『改正　人国記』　刊本全二冊

諸国の住民の人情・気質を記述したものであるが、十六世紀

8．改正人国記刊本２冊、切腹介錯式輯略写本１冊、武士初学指南写本１冊

中葉の成立とされる。この中の伊予の国の叙述にある「武士道」の語が、文献に現われる「武士道」の最も古い用例と言われている。本書は、元禄十四年（一七〇一）の刊本である。

9・『切腹介錯式輯略』　写本一冊

寛文十一年（一六七一）成立で、切腹の作法と介錯のやり方も書いたもの。嘉永四年（一八五一）筆写の小型の写本である。

10・『武士初学指南』写本一冊

享和二年（一八〇二）成立で、軍記物語などの有名な場面を紹介するとともに、武士たる者の心得を記した教養書の写本である。

おわりに

今回の寄贈書は、古川哲史名誉教授が長年月にわたる武士道研究の中で集められた非常に貴重な古典の書籍であり、「武道」を冠する本学はまことに相応しい蔵書を得たことになる。

古川哲史名誉教授寄贈の武士道の古典紹介

魚住孝至

An Introduction to the Classical Books on *Bushido* Donated by Emeritus Professor Tesshi FURUKAWA

Takashi UOZUMI

キーワード：古川哲史，武士道，国際武道大学図書館